

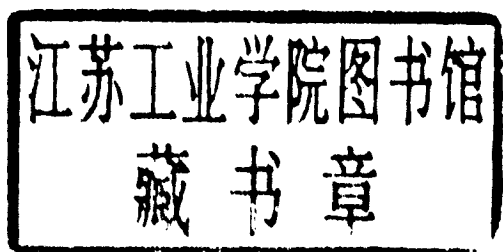
年刊歌集

一九九二年版

日本歌人々

年 刊 歌 集

1991年版



日 本 歌 人 ク ラ ブ

平成3年12月10日印刷
平成3年12月20日発行

年刊歌集 一九九一年版

編集者 年刊歌集編集委員会

発行者 水上正直

発行所 日本歌人クラブ

〒一五一 東京都渋谷区代々木2-23-1

ニュースデイトメナー八四七号

電話 ○三三二九九一六五八五(代)

振替 東京 八一三二二七四番

印刷所 新日本印刷株式会社

〒一六三 東京都新宿区市谷本村町3-29

定価 四、〇〇〇円(送料共)

1991年版目次

あ	い	う	え	お	か	き	く	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に
.....																				
一	二一	五九	六八	七二	一〇四	一三六	一四九	一五八	一七五	一九七	二一五	二二九	二三三	二三四	二六五	二六六	二七三	二七四	二八二	三〇四

ぬ	三十一
ね	三十二
の	三十三
は	三三八
ひ	三三七
ふ	三四七
へ	三六三
ほ	三六四
ま	三七一
み	三八七
む	四〇四
も	四〇七
や	四一五
ゆ	四三九
よ	四四一
ろ	四五二
わ	四五二
補遺	四六〇
出詠者住所録	卷末

あ

安	1
足	3
阿	4
相	5
青	6
赤	9
秋	10
浅	11
麻	14
朝	14
芦	15
梓	15
東	15
天	16
雨	16
綾	17
鮎	17
荒	18
新	18
有	20
	20

安西彩乃

みてらと沢蟹

うそぶくかに横向く石の羅漢像結ぶへの字の口許をかし
半円を大きく描く石橋に羅漢四体いづこ見ますや
ゆつくりと朱き沢蟹横這へり羅漢立ちます崖の下道
わが追へば走り早かる沢蟹の半ば隠るる土塊のあひ
かのなだりこれの木下につはぶきの黄花咲き立つ方広寺境内

安喰孝吉

葛桜

紅につばみ脹らむままに落つるカニサボテンをわれは嘆きぬ
薄ら雪を歩める鵪鶉のつと寄りて顔をあぐ吾のなを憐れむ
目瞑りて足踏みをするすれゆくは老化現象てふ案の定すれつ
帰り路の菓子舗に葛桜買ふとして売り切れぬは快からず
時代病むと思ふに通草の花こそりめぐる花蜂のかなしき営為

安達正博

台湾

門前の路上に座せる僧ありて報謝受けつつ経を誦しゐる
再見とことばやさしくかけあひて店いでてゆく若きふたりが
碧眼の僧かすかなる笑み見せぬ手の鉢に供物をさめしときに
異国感なき顔なれどかたれるは中国の言葉の乙女ら歩む
スタンドの台座に青銅の馬ありて右足跳ねるもの憂きさまに

安東久子

きさらぎ

きさらぎの月光しろき庭の上をよぎるけものを清く行かしむ
南天に積みゆく雪のましろきに翼をひろげひよどりは来る
雪だるまのややにし傾ぐ塀際に幼の足跡むきむきに散る
立杭の壺に満たせる寒の水を茎より上げて水仙ひらく
土掻げ芽吹けるもののあるからに朝な夕なに下りたちて見る

安藤いく子

面知らぬ父

たらの芽の味噌あへひと皿食卓に添へて一人の夕餉のおごり
癒えてなほ胸ぬちに潜む怯えあり痛とふ病のかくもしたたか
いるあせし写真一葉み出だしぬ面知らぬ父に母の寄り添ふ
自然保護を叫ぶ君ありその声のむなしく森の伐採すすむ
われの手を労働の手と言ひし女の嫺やかな指にダイヤの光る

安藤佳光あんどう かつこう

車椅子

入院の四つ月超えしを甲斐とせん酸素器付きの退院を賜う
願わくは隙ゆく駒を脚止に時空を超えん「こまつなぎ」はも
照り曇る脳を託せばもじずりの今年も咲きて我を寄らしむ
花博のエスカレーターを車椅子で足留客に頭下げつつ
車椅子で見し花博もおぼろめき記念のメダル取りいだしおり

安藤佐貴子あんどう さきこ

予後散策

散策も予後のつとめとやや重き足曳きてゆく苑の坂道
咲き初めて匂を放つエゴの下一人もとほる散るまでの日日
竹林の暗き湿度を埋めつくし竹の葉は散る無尽数のさま
筍の皮はがしゆく風の中空に渦なし竹の葉は舞ふ
梅雨ぐもり昏き木の下道ゆきて七月七日ひぐらしを聴く

安藤鶴子あんどう つるこ

庭

老梅にかげ忍ばせて鶯の声すき透る雨上がる庭
老木の山茶花下立つ像の真白き肌に花びら赤し
湯殿窓開けて散りくる雪柳闇夜に白く花明かりさす
年経ちし庭の植樹の吉野桜おぼろ月夜に花盛りなり
立ち行きて我子のかげなき庭山に孫等寄り来て駆け巡り居り

安藤寛あんどう ひろし

五首

健康は家族の愛に支へられ老の心に涙あるのみ
高齢を慮りて訪ひ来たる歌友すくなくなりて淋しき
百歳に近くよはひを身に享けて詩情を若く心をしぼる
老いの身を健やかに保つ幸せを清き詩情にすぎる日日なる
九星の神秘を仰ぐ庭の空地球の自轉棲みて氣付かず

安藤彦三郎あんどう ひこさぶろう

寂明庵日乗

再会を期待し得ざる程に老いまた逢ふ日までと別れ来にけり
思へば永き六十六年の友の一人俄かに死にたり心もそぞろ
よく来たね 漸く来たよ 掌を握る友老いてなほ明るく笑ふ
鈴虫は鳴く音が細くなりてきて鳴かざる朝は既に死にたり
秋の虫は命短きを識る故かひたぶるに鳴けりあはれ切なき

安藤ふみ子あんどう ふみこ

れんげ田に

紫雲英田の朝のまだきに鶉の何啄むか花かげに動く
れんげ田に犬遊ばせつつ腰おろす髭の老人に今朝も逢ひたり
れんげ摘み日がな遊べる女童ら花輪いくつも作りあたりき
子等去りて踏み荒らしたる紫雲英畑春の入り日の黄色に照らす
ひたすらに浮子見つめゐて何思ふ釣り人ひとり葉桜の土手

安藤美佐保 *

終の貌

白梅の散りしを掃きていたりけりわが終の貌すずやかにあれ
わが終の刻に浮かぶは誰が貌か或いは裡にさやぐ珊瑚樹
深海の魚の群游見るとき柳の絮毛かぜに吹かるる
咲き群るる夾竹桃の花照りて自が行末はもはや思わじ
つげの木の幹に張りつく秋蜥蜴あさの陽光をほしいますにす

安部登美子

空洞となりたる

血を吐きしわれを抱きて死ぬなよと叫びし夫の声を忘れず
死の谷の王家の墓か朝靄に漂ひ浮ぶ新宿高層ビル群
灯を消せば月光あまねき病室に臥し魚となりたるわれは瞑らぬ
森を追はれし木菟の親子に宿貸さむ左肺は深き空洞となりたる
歌は修羅歌は風狂 歌こそは一期の病と云ひし人あり

安部守男

愚かを怨む

やはらかに抱く形にかんらんは冬陽の中に葉を重ね合ふ
わが顔を鏡の中に見るごとく松山さんは写す地球の半円
米軍機襲ふ真下を逃げまどひし中国にてのわが戦争の頭つ
多国籍軍とふ米機の猛爆のテレビニュースにスイッチを切る
温暖化憂ふる地球ぞ中東を戦渦に燃やす愚かを怨む

安保 昇

東照宮ほか

八時間を乗り継ぎ来たる日光に昼には遅きそば喰ひてをり
東照宮いづれの森と振り向ける高きに板垣退助の像
聞き及ぶ眠り猫をば見るべしと人垣に来て眼をこらす
眼に止めて記憶に残すものありや彩鮮やけき彫刻のほか
彫刻の東照宮に劣るなし大猷院ここ家光の廟所

安楽城智子

暗の部分

美しき翹もぎ捨てて女王蟻出づることなき部屋に入りゆく
在る筈の富士を望めずわれ独り虚空に向かひ立ちつくしをり
雨避けて灌木の蔭拾ひゆく野鳥の軽さを羨しみて見る
「人形と遊ぶ母看つつ暮れゆく」と友の便りに疲れの滲む
山あひの町かぎろへば日の巡り来るを選びて鳶は舞ひをり

足立早苗

水鳥

夕つ日の入江に漂ふ水鳥の翹は時折錦に光る
愛らしき水かき持ちて泳ぎ行く水鳥仲間の生活リズム
廃船にのた打つ波の合ひ間より錆びし錨の見えがくれする
中海を茜と染めて陽の沈む水鳥の群れ薄暮に漂ふ
霧深き朝は出船の警笛がしきり聞ゆる吾が港町

足立 春美 あだち はるみ

妻の肩先

レントゲンとられベッドに仰向けの妻は腰椎骨折といふ
妻の足打撲もあるといふ医師はポケットに片手入れてゐるらし
治療鍼嫌がる妻を叱りつつ腰部のつばに手をあてがひぬ
口ごもり何かを言へる妻の声耳すませれば寝息たてゐる
病む身体治療受けつつ眠りゆく妻の肩先冷ゆる揉みやる

足立 弘子 あだち ひろこ * 四季

この春の梅匂い立つ明るさに垣根に人のしたしくありぬ
ゆつくりと地上立ちのぼる水蒸気飄々とせる雲すみれ色
暮れてゆく街もネオンも活気づき生きている響き胸に迫り来
照りかぎり狂えるごとくに一変す蒼き山並み雷雲のゆく
濡れし目の仔牛は遊ぶしなやかな四肢美しと見て冬景色

阿川 千恵子 あがわち えこ

五 首

朝明り射す戸を引けば鶯の声透りきぬめざめのすがし
吹き荒れし疾風をさまり咲き盛る桜花の重なり空にうき颯つ
雨にうるみ緋の色透沈る桃の花ひと本ながら華やぐ狭庭
久しくも見ざりし雪の富士に逢ふ春冷えの朝石和の町に
あぐらゐて息子は猫を抱くわが前にいとしき者の並ぶ安けさ

阿久津 いさお あくつ いさお 亡き母

はく息もか細き母の細き手に点滴落つるを見つつ夜も更く
慰むる言葉もあらず病む母のミイラの如き手をさすり居り
長病みてひっそり逝きし老い母よ死の苦しみは面に見せず
長病みの母喜びし胡蝶蘭我の最後の歳暮となりき
福寿草黄もあざやかに咲き初めぬ愛でたる母の亡き後の春

阿比留 正巳 あひる まさみ * 五 首

幾そたび海を渡りてこし博多 湾の島々その名を知らず
波高き海を超えきて湾内に船はいりしか揺れおさまりぬ
赤き灯の浮標いくつも舷側を過ぎゆきにけり暗き海面を
青赤の灯マストに掲げつつ小さき船の沖へと向う
梅雨空の闇にみえいる漁火の影ぼつぼつと暮色の深し

阿部 一直 あべ かずなお * 歌にすくわる

勢いつつ森を出で来しお神輿が声をおとして信号を待つ
振り向けば吾の成したる何もなく伝来の地はただ細くゆく
先に逝くも残るも哀しと笑いつつ妻と日課の朝茶をすす
富も名も成さず辛苦を舐めて来てはからずも今歌にすくわる
「神の如し」と称ばれし父の性を継ぎ吾は今なお税上がらず

阿部キミ

石楠花

花びらの縁はのぼのと赤らめて今日の石楠花夢みる心地
日に幾度見入る石楠花その色を変へる不思議に惹き込まれゆく
一樹皆淡紅色に変わる朝石楠花は乙女の淡きおもかげ
吾が庭に移りて十年石楠花は主の心揺さぶりやまず
花の命終に近く石楠花はいまやわびしき乳色の錆

阿部十三

花梨

吹きなびく芒穂のかなた翳りつつ流るる水には風の見えざる
松の枯葉散りしく径の何がなし夢の果てたる思ひこそすれ
足弱のわが耳搏ちてこころよき音たて妻の段くだりくる
傷のなき花梨幾顆の枝に垂る傷なきことも何かさびしく
時めきの一時期ありし人の死を忘れあるころとなりて伝ふる

阿部千代

窓の月光

窓にさす月光淡く独り居の炬燵の上を僅かに照らす
吹き荒ぶ風音夜の耳に鳴るわが歳月のなかの風おと
きさらぎの空澄みわたり朝光は高速道の上に輝く
薬師寺におはす如来のまみやさし現身われの心よりゆく
露にぬれ槍の穂先の並ぶごとと葱畑の緑夏空をさす

阿部米子

五首

田の中の一つ家なりしが十年経て其処に彼処にハイカラな家
これしきの事と思へどうち沈み十日を経たり雪の下咲く
辛うじて己れに勝ちぬ朝床に何となければ歯を噛みてをり
庭に生ふ苗を給ひて二十年今年も芽を摘む門冠り松
梅雨晴れとならむ気配の青田道今朝はとんぼの先導にゆく

阿部麗水

老残の歌

目は眼鏡耳は補聴器歯は義歯に老軀は杖に頼りて歩む
夫婦共明治生まれは町内にわが世帯のみつましく暮らす
穴ごもるけだものどもの羨ましあまた除雪に喘ぐ冬来る
小用に起くる回数減らさむと冬は午後より茶をひかへる
喘ぎつつ除雪を終へて晩酌の熱燗五臓六腑に沁むる

相崎貴子

五首

牡丹とふ名のはなやぎもはかなかり地にふれずして消ゆる春雪
幻聴は水浴ぶる児らの弾む声ふる里の橋わたりゆくととき
約束の宴はたさず逝きし兄浄土でシャンパン抜きてゐるかも
などかくものおもはしむ月澄む夜杳き君との影法師うかぶ
寒月に鋭く澄みし雪庭に裸木の影をふとゆらす風

相田美恵子

母のふるさと

みぞそばの盛り過ぎつつ行く水に母が里なる駒ヶ岳映る
子守奉公なしつつ母の通ひたる分校跡地に礎石探せり
泣く子負ひ廊下に授業受けたりし母の幼な日聞きつつ旅す
めぐりゆくボッカ資料館に飾らるる蓑靴を母は懐かしみゐる
湿原に足を踏み入れ老い母の釣舟草のくれなゐを摘む

相野谷森次

* 紺青無限

熱帯性低気圧と変る台風の名残りが吹けり樺大樹に
鳴く蟬の大方絶えて秋に入るひと日の空の紺青無限
紅葉に入るひとときの光持つ南京櫨の小林そよぐ
とりたてて言わば爪切ることなどもあと幾度の老の所業ぞ
雪となる朝の寒氣に野鳥らの群れて遙かの飛翔きらめく

相原恵佐子

桜

渋滞のバスの窓より見る桜舞台の花の景色となれり
天蓋の桜につつまるるバスのなかゆるゆる走りて駅に着きたり
背骨の芯に鉛の錘があるやうな朝の目覚めに不安の増しくる
街灯の余光に捉へたる男の顔すれ違ひざまわれば見据ゑつ
夜の道を足音もなく追ひ越しし男の持てる袋がめだつ

相原健一

受験子家族

雪まとひ帰り来し子に家族らは受験の首尾を問ひ難くをり
受験の首尾深くは触れず降り止まぬ夕べの雪に話をそらす
速達にて届きし電子郵便は何を告ぐるや子の帰り待つ
希望校あれこれ選れど子がえらぶ理想の学部射程に遠し
雪の紐被く電線柱より柱につづく一日の重さ

青木 明子

パンが輝く

パンを焼くわが店開くる音ひびきそれより街の一日はじまる
寒ながら春を思はず仕事場にわが焼き上げしパンが輝く
春雷の遠のく空に虹の立ち又仕事場にパンを焼きつぐ
パン焼きて一生を終ふる悔などもあらむ五勺の酒に酔ふ夫
懸命に生くるは淋しパン売りに受けたる小銭掌に数へつつ

青木 朝子

* 以下余白

朝より淡くやさしきものの降る二葉亭四迷の講義はさぼる
以下余白すでに埋むる術はなし夢一文字の帯しめて立つ
硝子戸の向う静かに夕暮れて立ち話し居し二人も去りぬ
肉剝げし鶏を机上にしつらそその声聴くとビュッフエは描く
幼子がこぼしてつける胸の汚点癒され難き心のように

青木綾子 あおき あやこ

念珠

香をたき念珠を鳴らして仏壇にしづもる夫のねむりを覚ます
咲きいでし黄の水仙を供花としてこころ静かに彼岸を迎ふ
燕麦の青き筑後路遠く来て普濟寺堂の修忌に坐す
山に向く二階の窓を開けはなち若葉見せなむ写真の夫に
先の世も銀河に近く端居して星ふる音をききてゐまさむ

青木きね夫 あおき きねお

五首

この老は何時か何処かで見た顔と入れ歯外した鏡を覗く
老いたればやがて吾にか妻にくる「或る日」「突然」の近づく恐怖
吾は汝の汝はわれのたを生き甲斐に余生を組むと小さき哲学
早苗田の果てに街の灯きらめきて入港のごと新居のペランダ
大山の谿吹きおろす春風が相模の灘に海鳴りとなる

青木幸一郎 あおき こういちろう

老後

耳に痛き事件相次ぎ起るとも生きる証と思ひてきかむ
遷る世の姿をつぶさに目にとらう倅せおもう生命長らえ
老いて臥す老後のことは忘れむと今日の仕事に生命をもやす
働く事が呆けの防止に役立つと言ひ言葉信じて今日も働く
冷えし手に妻の温もりの伝わりて沈む心をみたしてくれぬ

青木佐喜子 あおき さきこ

野分

かなしみのまなこを母の開かむか姥捨の面眼窩の深し
野分ともなりて訪ひませわが母のかなしみ育て老づくものか
やはやはと青む小草に影法師曳きて何なき歩みを延ばす
今生に掬ひしみどり顫たしめて「泪の茶杓」ひたと置かれぬ
水神と彫る石据うるいくところ馬籠いづこも雪消水ひびく

青木祥太 あおき しょうた

はつ夏の光

白々とアカメガシワの花見えて繁り盛り上るはつ夏の山
はつ夏の光を集め白々とアカメガシワは谷向うにも
熟れ麦は一面に照り匂ふなり心やすませむ何も思はずに
いにしへの猛き心のものとなりし如くにて若葉に歩む
牡丹の葉路の葉群のぐつたりとはつ夏の照り強し午後二時

青木千代子 あおき ちよこ

四季

揺れてゐる枝に止まりてけふもまたメロディのやうに鶯の鳴く
風にそよぐ緑葉の中に鮮やけし木苺の赤く熟れし実の見ゆ
音ひびき岩に落ちゆく谷川の涼しき風にとりこになりぬ
武士に想ひをよせつつ来し古都に白萩ゆるする夕の風吹く
昨夜よりの雪は大地を白く染め凍てし山茶花の朱を映せり

青木美沙子

五首

復た朝に遭へ得るや息も絶えだえに大発作続き喘ぐ二十時間
経口食一人もなし配膳時の混雑に遠し集中治療室は
咳きこみて独り寝る家潮騒の唸りとどろきて海は荒るるか
信州は雪来る頃か裸足にて砂踏み歩む富士見ゆる浜
大浪来て我が足跡を消しゆきぬ生き居し事もかくの如きか

青木陽子

柳川

柳川の濁れる水を吸ひ上げて咲く花菖蒲紫淡し
なまこ壁ゆらめく水に往き交へる舟の船頭瘦身撓ふ
幾年を水路背にして揺るがざる醬油並倉西日に乾く
水藻より首を上ぐるかいつぶり濡るる嘴左右に向けぬ
啼かずゆく鶺鴒一羽黒白の羽根にやさしき今日の残照

青木よし江

夫の城

音響器の設備なりたる部屋にこもり夫は城ぞと満足げなり
松の芽の摘めぬとて夫はいらだてりその病む指の痛みはげしく
真盛りの花枝かかぐる桃の木に寒のもどりの粉雪の舞ふ
待望の女孫生れたり元氣よき産声を胸にしかと受けとむ
展示室の特産品の数々を見つつあらためて故里を知る

青野うた

限畔

阿武隈の土堤のあらくさ刈られぬて瀬音ひろがり九月も終る
川の瀬に白鷺一羽たちをりてあたり見廻すその影うつる
阿武隈の中洲にむる鴨の数かぞへて今朝の心おちつく
さはさはと薄の尾波つづきゆき阿武隈川の瀬の音を消す
去り際に病氣楽み居給へと言ひし弟も七十を過ぐ

青野智道

花を飾りて

永遠のいのちのうちの一瞬をとらへて無常と御仏言へり
美しく花を飾りてそれぞれに寺を守りゆけと師ののらしし思ふ
われに代りて御詠歌講の先達をなすを嫌がらずこの頃妻は
長からぬ一夏のわがはかなごと朝あき境内の草をむしれり
悲しみを苦しみを人に説きながらどれ程の苦を身に負ふわれか

青柳絢子

雪国の四季

笹谷トンネル越ゆる時いつも「雪国」の書き出し自づ呟きてゐる
春雷の轟けばこの音好きと言ふ計り難きよ少女は十四
訪ね行けば祭囃子の流れ居る友住む村は桃の花盛り
旅恋ふる我なりしかな夫逝きて旅は淋しきものと知りたり
冷き水好む夫なりき佛前の水に氷片入れて安らぐ

青柳 あおやなぎ 猛 たけし

磯山

磯菊の咲き群がれる磯山を犬を先にし下りゆくなり
われにつき来たりし犬も女男ヶ鼻に海より出づる月を待つなり
歳晩に痛み堪へてをりし齒を正月抜きてさびしみるなり
ひとところ昨夜の雨の流したる山砂ふみて歩む山鳩
方形の窓より見えて青天に硝子一つが日にひかりをり

青柳千萼 あおやなぎ ちがく

炎そして穩

一つなに胸内去りて炎熱をドライフラワーの首引据うる
手巾をば青白黄と重ね積み呼子笛なとこそりと隠す
救急のサイレン交錯日の果つる矢車菊の紫の萎えるまま
夏雲をきりりとはみて塩瀬帯それより女の行方しれず
みだれ萩灯し束ねて径明かしひよいと一とび野兔になる

青山 あおやま かほる

五首

山二つまたも消さるる日の近し手擦の著き歙握りしむ
来春は埋めたてらるる稲田なり早苗のそよぎ見納めと佇つ
そよ風がそよ風を呼ぶ水の面に早苗とともに茜はゆらぐ
山頂に落日近し淡き陽矢今日の名残に山襷を射す
待ちに待ち八年目にて生れし孫園児となれり平成二年

赤井清子 あかい きよこ

五首

新しき紙反古多きこの日頃過ぎし戦時の日々が頭ちくる
答案の用紙もなくして戦争の渦にもまれし学生のころ
忠と孝を教へられつつ戦のつづきてゐたる昭和を生きぬ
傷兵を護りて戦火逃れゆきし七月九日は四十五年
前戦火より逃れて来たる芋畑の野末に黒き太陽昇る

赤井鈴子 あかい すずこ

和歌山城

真向ひの和歌山城の麓より今日も明けそむ穩しきまでに
今朝の城晴れやかに見ゆ澄む空に二羽の鳶は輪を描きゆく
朝明けと共にひととき飛び交へる鳩の群あり城をめぐりて
日溜りの鳩の首毛は玉虫に光り動きて幻想さそふ
城と森悠然として黙しをり平成二年は終らむとして

赤石 あかいし 治子 はるこ

五首

くれなゐの色濃き薔薇 きうび あした切り滴る露を唇に吸ふ
秋のばら赤く鋭き棘持てり刺さるればげに人は死なむよ
蚊に似たる水晶体の曇り飛びあしたの床にわが覚め居たり
今日われ窺ひたりき人の眼を 深井の底を覗けるがごと
レモン哀歌譜んぜし日よ わが前にすなく光る一個のレモン

赤川 達海

ひがん桜

戦災も戦後も経にし義兄は逝く春の彼岸の中日嵐夜

義兄の計は春の彼岸のなか日なりつどふひと多くみなしかなる
義兄の計に集ひしはみな久しきも語らふもなく溜りゐにける
義兄逝きし春の彼岸夜むなしけれ姉の案内で書庫に入りみき
亡き義兄に嵐吹く日はあらざるか愛蔵本の書庫のしづけさよ

赤津 健壽

過去世時雨

瑠璃光の浄土もかくと思ふまで輝きわたる大和国原

たゆたひてゐたりし者のひらひらと領巾振り初むる妾女にあらむ
星の位置確かめむとツと立ち上る吉野を出でし大海人皇子
ほしいままに來たれる道はせばまりて風を伴ふ古京の夕べ
寺屋根を音たてて過ぐるものあれば過去世時雨と思ひつつゐる

赤星 千鶴子

遠 桜

われを待つものある胸の温かさ赤信号の辻に佇ちをり

支へられてゐるは己れか車椅子の夫穏やかにわれを叱れり
遠き過去春を別れし人ありき桜並木路いまは裸木
浅春に白き花多く来る日くる日身めぐりのもの全ていとしく
遠桜茫と白くてわれに優し過去の桜も今年の花も

赤松 伴子 * 命一途に

秋冷に色増しゆける紅葉を受けるわが掌の乾くかなし

裡ふかく燃ゆる哀しみしんと肩にのる雪須臾とどまらず
曖昧は許され難しカトレアは命一途に紅を研ぐ
過去形の愛の告白・グラスなる氷片なかなか溶けてはくれぬ
うつうつと悔曳きずりて患む窓にものの芽だしの気配するとし

赤松 宜子

孫優子に捧ぐ

持久走三周にして力尽き倒れし優子ふたたび立たず

今しばしこの世を見むと欲りをるか長き睫毛の目の閉ぢ難く
最期の汗の沁みてをらむグラウンドの土一握り今朝届きたり
恋の事ども語り合ふ日を待ちぬしに蕾のままに優子逝きたり
孫を逝かせし痛みを分つ夫も亡く庭に屈みてただに草とる

秋元 みつ枝

街の空間

夜となればあかりもれゐる高層のビルの谷間の傾きし家の
所在無く見下す都会のビル跡に雪降りくれば冬野思はず
積りたる雪寂さびし方形の空地浄めむと神のくだるや
高速道路の下に起き臥すをとこの姿の見えぬ雪やみし朝
岸の辺に緑地作るとふ川底に打つ鉄脚の音のとどろく

秋元 和子

寂しき声

天に向き丹頂は鳴くかうかうと寂しき声を聞く北の旅
灰色の氷のモザイク流水の軋む音するオホーツクの海
長ながと音ひきずりて夜の貨車きのふとけふの境こえたり
はし葡萄のやうねと笑ひ言葉なく熱きタオルに母の胸ぬぐふ
夜通しを痛み訴ふる母とゐて窓の夜明けを美しと見る

秋本 文武

綾香・翔・還曆

ピカピカと瞳輝く入園式ざわめきの中綾香の一声
祝電は「ハッピーバースデーあやか」大阪に住む彼女は四歳
髪の手濃く君安産し女孫男孫そろう十月十五日
皇后様より金色有功章親授され日赤大会場のみどりを妻と
午歳の夏至の午の日知事公館にて頂きたりし紺綬褒章を

秋山 元

思ひけぶらふ

アンギオのものなか微睡む台上にわがうつし身の垣間みし黄泉
心臓の奥処にふかくカテーテル生きものごと侵入しをり
枯蓮は折れ釘のごと水に漬き日本にも似て右顧左眊する
遠近と水に浸れる枯蓮に五臓六腑の思ひけぶらふ
死貌の端正にして胸の辺の袈裟うち呼吸することし

秋山美恵子

五首

花しぐれ面影にして桜木の木の葉しぐるる秋津とぶ日々
はるけくも伊良湖岬や三重にゆく蝶の渡りに感動しきり
陽炎の長閑けき心せせらぎのきらら耀ふ心もち生きむ
ふとみれば真白き牡丹ふふみをり一もの茎に一花を抱く
野アザミやシモツケ草の群落到に心なごみゆく富士ふもと原

浅井不二雄

五首

神苑の懸け樋の水の音やさし竹の柄杓の青匂いつつ
妻が切りわれ運び出す朝穫りのキャベツが籠にきしきしと鳴る
噴霧せし薬臭残る茄子畑に羽音ひそかな花虹の飛ぶ
この雨を心ゆくまで吸う畑か移植を終えしキャベツ想う夜
時雨夜の車窓に潤む灯を見つつ君住む街を旅に過ぎゆく

浅枝きよみ

冬への加速

紅葉せる秋の無量の山をゆく樹間に見えつつ湖遠し
先んずる一羽につづき水鳥は水面を搏ちて湖を翔びたつ
葉を落し清みて凜たり日の透けるぶなの林の樹形うつくし
物の怪に憑かれたるがに穂すすきはいま一斉に銀になびけり
過疎ふかき県境の里山柿の赤く日に光る霜にも落ちず

浅生千代子

*

図書館

ずつしりと重き図鑑を膝の上に頁繰るとき空氣動きぬ
何十年生きても知らぬことばかり目に見る図鑑の一部分さえ
何万の蔵書とは言えわれの読む本の傾向保守的すぎる
月二回借りる書籍も先ず重さ手に確めて棚に戻せり
乱読と思ひしわれの選択もひとつの道をいつも離れず

浅川喜代子

五首

放映の討論夫とともに見る超高齡化の時代来たりて
椅子に寄りマッサージ機に足裏を軽くたたきて新聞をよむ
一夜さを泊り足らひて帰りゆくアメリカより出張の子は
風もなく落葉もあらぬ遊歩道朱の大蓼実をつけてをり
海に浴ふ松の林に小春日のふりこぼれをり八一の碑のあたり

浅川広一

五首

ジョン・レンン死して十年「ヘイマジン」の祈りは砂漠に頭つ壓氣棲
第九条さまたまたまた歪められ「身捨つるほどの祖国」はとほし
多国籍軍にはあらねビエールは「外人部隊」にスベードを抽き
クウェートを発ちゆきかなうすあをき蝶の群るるは韃靼の空
舗装路に踏みしだかれ 木犀の散り花古い地図に似てゐる

浅田きみ

紅葉炎だつ

峡の家の籬に咲ける乱菊の秋の陽ざしに照るを見て過ぐ
ゆれゆれて鉄の吊橋渡るなり深山の紅葉きはめむとして
岩肌の滑り危ふく登りきて御手洗の谿の絶景にたつ
晩秋の峽を埋むるもみぢ葉は炎だちつつ終をはなやぐ
岩肌に触れて散りゆくもみぢ葉は翻りつつ水面に落ちぬ

浅田鼓楼

島の四季

せり台に鰓動かせる黒鯛の眼は澄みて親潮の色
豊漁にところ狭しと雑魚を干す宮の広場も筵ひろげて
離りゆく波止場に母のシルエットいたく小さし夕光のなか
二の腕に鱗のいくつ光らせて島の若きら献血車待つ
天裂けて火柱轟く落雷に地下タビのまま父は逝きたり

浅田雅一

青春後期

古の菜摘みの里をいゆくとき身震うほどのおとめまぼろし
京都御所のしだれ桜の下くぐる君が声あぐ「光」のように
さびしらに乾き言うとき美しき余剰の思想もたざる君が
ブライダルピンクとう薔薇一つ挿し旅の夜祝うわが誕生日
ふるごとく白木蓮の散る日なりかく美しき喪失ありや

浅野加津子

五首

一枚の窓近く見ゆ山並の朝日に染まり今日の始まる
ペランダにしきりに来啼く雀らが羽音残して陽の中に消ゆ
青空の五機の飛行機音もなく画ける文字を夕陽にのこす
水嵩の増したる池の芦の陰小さき水鳥見えかくれする
真夏陽の吾が目に入りし野良猫は図太く長く四肢を投げだす

浅野サトエ

五首

眼を染むる菜の花壺にあふれさす美容院いまかぎりなく春
いつしらに座席埋まる昼のバス霞草抱く娘の瞳はブルー
戴柑子苔むす寺に色冴えて入りゆく庭に朝の日まだら
夕べまで水漬くタイルの調理場の天窓に夕の茜明るき
はばかり紙巻煙草に火を移す少女の客にも馴れし日日なり

浅野妃都美

母

学ばむと門出の吾を垂良乳根はふるさとの波止場に立ちて送り給ひぬ
妹せおひ吾が手を取りて泉境の橋の袂に立ちし母はも
「折々が遺言」と言ひし母の言思ひ出さるる秋雨の夜半
竹削り編針作り呉れし母日本列島の貧しかりし日
増産に村一番と讃へられ戦世母と芋掘りし丘

浅野瑞枝

出口川

おのが影ついばむ如く驚一羽水際に立てり強き脚見ゆ
爽やかに風出口川面に戦ぐ見つ愛語に遠きわれ佇める
若葉萌ゆ真昼の山はぬれぬれと刻の止まりし如く寂まる
倉に差す陽ざしの蒼く澄む見せて風冷えびえと今日は立秋
余生とは生きることなり敬老の祝日ひとりのワインかたむける

浅羽芳郎

一日一日

昨日に変らぬ一日 一本の楨剛直に風に立ちあゐる
砂まける風も風ぎたり路次裏のわび助の紅に心展くも
朝あかねあかときの光深み来てストック一輪彩たたせたり
峠路の長きを越えし中山を一すぢ貫きて国道一号線
明日は明日の風が吹くとふ上空は零下四十度の寒気ありて出歩く

浅原春枝

花悼む

花悼むことばを胸にあふれさせ咲き過ぎし牡丹つぎつぎに切る
ういういしく蕾ふくらむ芍薬のかたえに崩るる牡丹の愛し
葱坊主畑に隊列組みており月夜はひそかに行進すること
年金を受給する年迎えたり新茶の香りに咽び揉みおり
風に乗りにいま開きたる花菖蒲歓喜の花弁ふるわす朝